

□ F L O A T

□ キャスト

マー子

ガンジン先輩

おにいちゃん

ナガオさん

タチバナ

先生

杏

フィジカルお兄さん(マー子の普通さへの自意識)

とらんぺっこ(マー子の音の自意識)

ニュースキャスターA

ニュースキャスターB

生徒

クラーク記念国際高等学校演劇部 作

舞台は水面である。下側の方に椅子がうず高く積まれている。その上にとらんぺっこが座っている。トランペットを吹いている。中央辺りに一枚の畳が水面の上に浮いている。その畳の上には一人の女性が横たわっている。どうも高校生のようである。とらんぺっこがおかしな音を出すと、それに気づいたようにゆっくりと目を覚ます。

マー子「おはよう・・・とらんぺっこ。」

とらんぺっこ、まるで『大変な事になってるよ!』と言わんばかりにトランペットをむやみに吹く。

マー子「なになに、どうしたってのよ?うるさい!」

静まるとらんぺっこ。とあたりを見渡すマー子。

マー子「え・・・こいつはどえらいことになったな・・・畳・・・たたみ!?私、浮いた畳の上に乗ってるんだ。ほう!奇跡。これ

はもう奇跡だよ。ええと、何でこんなことになったんだっけ……。そうよそうそう。まずは整理しなけりゃ。いや？整理する前に助かることを考えた方がいいのか？でも状況がわからないと助かるうにも糸口が見当たらないよね。糸口……。名探偵か！名探偵しか使わないような言葉を今初めて使いました。おっと……」

とらんぺつがおかしな音を出すと畳が揺れる。

マー子「そうだった……。この畳、奇跡で浮いてるんだっけ……。というか、畳なんだから水が浸水してきたら沈んじゃうよね。沈む……。それもいいな。それもいいな。今まで浮いてる人生送ってきたんだから……。ここで沈んでみるのも……。いや、だめでしょ。3死んじやう死んじやう。苦しいのはいやよ。やーよ……。ってここでひとりごと言ってもどうにもならないか。混乱してるわね私。落ち着け。そうね……。決まった。まず私がやらなきやいけない事は……。自分を取り戻すことだ。私はどんな人間だったか……。整理してみよう。この水面に今までの人生を思い浮かべてみよう。」

マー子、水と記憶の中に沈んでいく。

○転校デビュー

と、そこへフィジカルお兄さん(以下フィジカルと表記)が走りこんでくる。

フィジカル「レッツミュージック!!」

とらんぺっこがチャイムのような音を鳴らすと一斉に学生たちが椅子を持って現れる。踊る一同。(スウイングしなけりや意味がない)ひとしきり踊ると一同座る。マー子の隣に先生が立つ。フィジカルお兄さん号令をあげる。

フィジカル「フィジコー!!普通の子!!全体——止まれ!!——いちにいさん!!——!!」

先生「始めよう。」

杏「起立!(トランペットを鳴らす※以下「トラ」と表記)」

フィジカル「全国のマー子ちゃん!!元気かな???フィジカルお兄さんだよ!!いいかい?今日は来るべき転校初日!!楽しいスクールオブライフを過ごすためにも張り切って普通の子を演じよう!!——!!」

一斉に立ち上がる一同。見回す先生。

杏「気をつけ！（トラ）」

フィジカル「ここで変な事したら高校生活終わっちゃうぞく……終わっちゃうぞく……ふ・つ・うの笑顔！一二い三！っ……！」

びしっ！と決める一同。マー子。何だか圧倒されてしまう。

杏「礼！（トラ）」

皆「おはようございます……！」

杏「着席！（トラ）」

フィジカル「マー子？マー子？がんばるんだ。君には生きづらい世の中だけど、仕方がないね！お母さんに恥をかかせないためにもく  
くレッツ普通の子……！」

一斉に座る一同。

マー子「わかってるからフィジカルお兄さんは黙ってて!!あ・・・」

どよめく一同。

先生「はいはい、静かに。マー子さん、大丈夫？」

マー子「ああ、はい、申し訳ない。」

笑う一同。

先生「ゴホン、今日は皆さんの新しい仲間を紹介します。マー子さんです。挨拶できるかな？」

フィジカル「でっきるかな!でっきるかな!!!(トラ)」

マー子「できます!ええと、転校生です。母親の仕事の関係で転校してきました。えーと・・・えええと。あー、出てこない。よろしく、よろしくお願いします。」

先生「名前名前。」

マー子「ああ、それだ、それ!マー子ですよろしくお願いします!」

皆、笑う。

先生「マー子さん、ほかに何か言っておくことはあるかしら？」

フィジカル「あるんじゃないかな??マー子!あるんじゃないか??(トラ)」

マー子「そうだ・・・そうでした。そうです。私、耳がよすぎるから。大人数の中になると。時々、音がわーとなって教室を出ちゃったりするんです。することがあります。そのあたり、お見知りおきを。」

先生「お見知りおき(笑う)」

フィジカル「おみしりおき!!それは減点だよマー子ちゃん!!(トラ)」

マー子「あああ、おかしいですよ。わからないですよ。ごめんなさい。こういう人間なんで、よろしく、お願いします。」

先生「はい、ありがとうございます。さっきマー子さんもおっしゃってましたけど。お母さんの仕事の関係で転校してくるようになりました。学校生活の中で、わからないことがあったら、皆色々教えてやってね。委員長。」

杏「はい、こんにちは、じゃあ席は・・・」

タチバナ「ここ、空いています。」

杏「タチバナさんの隣にお願いね。」

マー子「申し訳ない、申し訳ない。」

笑っている生徒たち。

マー子「こちらで？」

タチバナ「うん、そこ。」

先生「じゃあ、連絡事項からね、文化祭の実行委員長の件だけど、ナガオさんにやってもらう事に決まりました。委員長、惜しかったけどね、僅差でナガオさんになっちゃった。」

杏「投票で決まった事ですから。わたしはナガオさんのサポートに回ろうと思います。」

次第に周りの声が聞こえなくなっていく。その中で、タチバナの声だけが鮮明に聞こえる。

タチバナ「ねえ、それってキャラづけ？」

マー子「キャラ付けとは？」

タチバナ「……まあいいけどさ。あんたさ、もしかして……」



マ一子「・・・あんた、嫌い。」

マ一子がそう言うと、タチバナ、立ち上がり椅子を投げつける(当たらないように)皆、水面に戻っていく。

○ガンジン先輩

マー子「タチバナ、そうだ思い出した。あいつ最悪だ。そうだ。あいつのおかげでこの後大変だったんだ。私だってこれが普通なんだ・・・なんとか溶け込もうとしてたつてのに。なのに何様だ？タチバナ。ターチーバナー！あああ！腹立ってきた！！」

(トラ)畳が揺れる。

マー子「落ち着け、マー子。水没は刻一刻と迫っている。そうだよ、そんな昔の事から思い出してたら気づいたころには水の中だよ。ん？(トラ)」

遠くの水辺を進んでくるものがある。バナナボートである。バナナボートには一人の青年がまたがっている。青年はサングラスをかけ、目が見えない様子。

ガンジン「だれだ？そこに誰かいるのか？」

マー子「え？？もしかして・・・ガンジン先輩？おおおガンジン先輩！・・・本物だ！・・・！(トラ)」

ガンジン「む？女の子か？？どこの誰かは知らないが無事で何よりだ！！」

マー子「ガンジン先輩こそ。目の見えない人がバナナボートで登場とは・・・高校演劇始まって以来の登場の仕方じゃないですか？と  
いかどうしてこんなところに？」

ガンジン「救える命があってよかった。ニュースを見て、いてもたってもいられなくなってね。こうして救援物資を持って漕ぎ出した  
ってわけさ。そういえば君の名前は？いや、君の名は？」

マー子「何で言い直した。マー子って言います。ガンジン先輩の後輩にあたります！いつも動画拝見してます！！！！しかしなんでバナ  
ナボートなんです？」

ガンジン「いやあほら、夏休みにもうすぐなるじゃない？」

マー子「はい。」

ガンジン「想像するよね？どんな夏にしようか。」

マー子「はい。」

ガンジン「で、バナナボートよ。(トラ)」

マー子「は？だいぶ間飛んでる気がするんですけど・・・」

ガンジン「バナナボートよ。」

マー子「推しますね、バナナボート。」

ガンジン「えと、マー子ちゃんは誰かほかの人に会った？」

マー子「いや、会ってないですけど。というか、さっき目をさまして・・・」

ガンジン「そうかい。ほら、受け取りなさい、救援物資だ。背負っていたリュックを投げる」

マー子「ちょ！そっちじゃねえっす！！」

ガンジン「外したか。そっちだと思ったんだけど・・・」

マー子「無謀を絵にかいたような人だ・・・あー救援物資が流れていく・・・」

ガンジン「マー子ちゃんは今どういう状態？」

マー子「畳です。浮いた畳の上に乗ってます。身動き取れなくて困ってたところです。あ、そうだ！良かったらそのバナナボートに乗せてもらえませんか？ほら、先輩目が見えないわけだし、何かと不便でしょう？私が目になりますよ！」

ガンジン「君が？」

マー子「はい。」

ガンジン「僕のバナナボートに？」

マー子「はい。」

ガンジン「ごめん、なんかそれはないかな。助け呼んでくるよ。」

マー子「ええ？ちょ、ちょっと待ってくださいよ！（トラ）」

ガンジン「じゃあ、また後で〜!〜!」

マー子「ガンジン先輩!!ガンジンセンパイ!!ガンジン・カムバーク〜!〜!(トラ)」

ガンジン先輩、行ってしまおう。

マー子「何だろう・・・何だか強制的にフラれた気分。え?私嫌われた?もしかして・・・嫌われ・・・ナガオ・・・さん・・・(トラ)」

○ナガオさん

ナガオが現れる。公園の風景が描き出される。

ナガオ「マー子ちゃん？」

マー子「ああ・・・ええと・・・」

ナガオ「ナガオリン子、同じクラスなの。」

マー子「ああ初めまして・・・初めましてはおかしいか・・・こんにちは。」

ナガオ「大変だったね、皆あんな風に聞かなくなっちゃったっていいのに・・・」

マー子「ああ・・・慣れてますから・・・慣れっここでやんすよ。」

ナガオ「ふふ・・・マー子ちゃんは面白いね。」

マー子「そうでやんすか？ああなんでこんなしゃべり方になってるんだろ・・・気持ち悪いですよ。ごめんなさい。」

ナガオ「ううん、私もあのクラスじゃ『ウイテル』から。」

マー子「『ウイテル？』」

ナガオ「そう、ウイテル。だから気持ちは分かるよ。」

マー子「そうか・・・私はウイテルんだ・・・じゃあもつと沈まなきゃ・・・」

ナガオ「沈む・・・そうか、そうね。沈んで彼らのところまでたどり着いて、浮かばないようにしなきゃならない。おかしいよね、そんなの。」

マー子「でも、そうした方が・・・お母さんも・・・」

ナガオ「・・・変だよね」

マー子「変？」

ナガオ「ほら、だって皆大人たちは個性を大事にしなさいっていうでしょ？でも私たちみたいに浮いてたら周りに合わせなさい、協調性を大事にしなさいって言うのよ。矛盾よ。」

マー子「よくわかんねえっす・・・生きにくいっすね。」

ナガオ「生きにくいね。」

マー子「でもナガオさんは普通に見える。私から見たら大分・・・」

ナガオ「大分オモリを仕込んでるからね。」

マー子「オモリ？(トラ)」

ナガオ「浮かないように心にオモリを仕込んでるの。」

マー子「ああ・・・そういう比喻表現。ナガオさんはどこがウイテルんすか？」

ナガオ「・・・マー子ちゃん、友達になろう？」

マー子「え？答えになってないっすけど。」

ナガオ「秘密があったほうがミステリアスでいいでしょ？」

マー子「そういう問題っすか？」

ナガオ「そういう問題っす。」

マー子「あ・・・(トラ)」

笑う二人。

ナガオ「じゃあ、帰るね。また明日でやんす。」

マー子「うん、また明日でやんす。」

ナガオ「あ、そうそう。」

マー子「何？」

ナガオ「私が潜り方、教えてあげる。明日から特訓よ！」

フィジカル「現れて(うおおおお!!!!特訓だ!!!!!!」

二人「フィジカルとマー子(望むところだ!!!!師匠、お願いします!」

ナガオ、去っていく。

○スクールオブダイブ

フィジカル「特訓だー！！！！訓練だー！！！！（トラ）」

マー子「あんたたちは黙ってて・・・ナガオさんはいい人だ。うん、いい人だ。だからすぐに友達になった・・・友達・・・友達だったのかな・・・とにかく私もそれからオモリを仕込んだ。そして皆がいるところまで沈んでみることにした。学校生活、素潜りだ。」  
フィジカル「スクールオブダイブー！！！！」

マー子、海に飛び込んでみる。そこには様々な生徒たちが泳いでくる。水の中だ。

フィジカル「ぜんたいーい！！！！普通ー！！！！いち・にい・さんー！！！！」

皆「学校生活しゅっしゅっしゅっ！！！！普通を装いしゅっしゅっしゅっ！！！！浮かないようにしゅっしゅっしゅっ！！！！写真は隅っこに。ぱっしゅー！！！！」

シャッターがきらられる音。全体写真を撮っているようだがマー子とナガオさんは隅の方に目立たないように映る。水の中でゆっくりと

学生生活が動いていく。途中マー子息苦しくなってくる。ナガオさん、マー子を引っ張って陸に上げる。と終礼のチャイムのトランペット。と皆いなくなる。

二人「ぶはああ！！！」

ナガオ「その調子よマー子ちゃん、だいぶ馴染んでたじゃない！」

マー子「大分、馴染んできた。潜れるようになった・・・でも・・・」

ナガオ「学校生活は息苦しいね！」

マー子「いきぐるしーっす！！！！！」

笑いあう二人。

ナガオ「いけない、もう帰らないと。」

マー子「いつもこの時間っすね。何かあるんすか？」

ナガオ「しょうがない、じゃあマー子ちゃんには教えてあげよう。ガンジン先輩よ。」

マー子「ガンジン先輩？(トラ)」

ナガオがスマートフォンを開くと、別の舞台にガンジン先輩が現れる。

ナガオ「ガンジン先輩はね。ユーチューバーなのよ。」

ガンジン「nan!nan!namamidabutsu!人生は一期一会!どうも釈迦牟尼仏陀も唯我独尊。ガンジンです!!今日は皆と約束してた通り、閻魔通り越して艱難辛苦味噌焼きそばに挑戦してみたいと思います!!」

マー子「おお、なかなかだよ。(トラ)」

フィジカル「(現れて)何か同じ匂いを感じる。(どらんぺっこと共に見に行く)」

ナガオ「ガンジン先輩はね、私たちの二個上?かな?この学校の卒業生なの。」

マー子「へえ、ってこの人・・・もしかして目が見えない?」

ナガオ「そうなの、だからガンジンって名乗ってるみたい。病気で見えなくなったらしいんだけど、こうやって大学生しながら動画配信してるってわけ。これは辛い物食べてるけど、悩み相談とかやってたりするのよ。」

マー子「悩み相談・・・なかなかのパンチ力。できる。(トラ)」

ナガオ「これでも結構人気があるんだから。」

マー子「世の中分らないことだらけっすね。ああ、なるほど。この人の配信動画を見るために・・・」

ナガオ「そうなの、やっぱりこういうのはライブで見ないとね。それでね、今度文化祭があるじゃない。そこに来てもらえるように手紙を出してるのよ。」

マー子「文化祭にこの濃い人が・・・」

ナガオ「ふふ、楽しみでしょ。」

マー子「そうっすね、なんか、この人も私たちと一緒に匂いがする。」

とら・フィジ「それ!」

ナガオ「そう、ガンジン先輩はね、私たちみたいなマイノリティの味方なのよ。きっとガンジン先輩の話を聞いたら、この学校の人たちだって少しは私たちウイテル人の事を・・・」

そこへタチバナが現れる。

タチバナ「リンコ、ちょっと話があるんだけど。顔貸して。(去る)」

ナガオ「・・・(トラ)」

マー子「大丈夫?ナガオさん・・・」

ナガオ「うん・・・じゃあ先に帰るね。また明日でやんす。」

マー子「明日でやんす。(トラ)」

去るタチバナとナガオ。

マー子「後をつけたわけじゃない。けど、たまたま二人が話しているところに通りかかった。話し声は聞こえなかったけど・・・ナガオさん泣いてたな・・・やっぱりタチバナ最低だ。でもそのまま素通りした私も・・・」

フィジカル「最低だ。(消える)」

マー子「え・・・」

とらんぺっこ「最低だよ・・・」

そう言うフィジカルお兄さんととらんぺっこ、いなくなる。マー子、一人になる。

マー子「フィジカルお兄さん！とらんぺっこー！！・・・最低・・・それわかんないな。タチバナが最低なのはわかる。学校みんなが最低なもの・・・でも本当に最低なのは・・・」

○浮離

再び公園の風景、ナガオがやって来る。

ナガオ「マー子ちゃん。」

マー子「ナガオさん……だいじょ……」

と、突然マー子にナガオがキスしようとする。咄嗟によけるマー子。

マー子「え……」

ナガオ「ごめん……今のは忘れて。」

マー子「冗談……っすよね。」

ナガオ「……冗談よ。」

マー子「……」

ナガオ「・・・ごめん、今日は帰るね。」

マー子「ナガオさん！」

ナガオ、足早に去ろうとする。

マー子「泣いてた・・・え・・・どういう事？え・・・」

教室の場面に移る。と、そこへタチバナが現れる。

マー子「タチバナ・・・」

突然殴りつけるタチバナ。

マー子「なにを・・・」

取っ組み合いの喧嘩になる二人。殴り合いになる。そこへ先生がかけつけて二人を引き離す。

先生「あなたたち、なにやってるの！やめなさい！！」

そこへ生徒たちが大勢現れる。お母さんも現れる。

先生「二人とも説明をしなさい！！」

マ一子「知らない知らない！わからないわよ！！ナガオさんと話してたら突然キスされそうになって、避けたら、突然ナガオさんが悲しそうになって！！そしてたらタチバナが来て、突然殴られて！！何が何だかわからない！！私は何も悪いことしてない！！」

皆、一斉にナガオを見る。

ナガオ「ちがう・・・違うの・・・」

皆「ツイートしよ。」

ナガオ「え・・・」

皆「ウラアカでツイートしよ。(そういうと方々に去る皆。)」

タチバナ「リンコ・・・リンコ!!やめろお前ら!やめろ!!!!」

走り抜けるナガオ。その場を去っていく皆。追いかけて去るタチバナ。フィジカルお兄さんとらんぺっこが現れる。

マー子「ねえ・・・私、悪くないよね?私、悪くないでしょ?何とか言っよ!!」

二人「あなたは・・・どうして普通にできないの・・・」

フィジカルお兄さんとらんぺっこ、その場を去る。

マー子「お母さん!!!!ごめんなさい・・・お母さん!!!!みんななくなっちゃう・・・昔からみんな・・・」

彼方に携帯ゲーム機を手に持ったおにいちゃんが現れる。

おにいちゃん「・・・(なにかぼそぼそ言ってる)」

マー子「・・・おにいちゃん・・・」

おにいちゃん「・・・(何処かに行こうとする)」

とらんぺっこ「おにいちゃん。ねえ、前みたいに遊ぼうよ。お母さんとお父さんと、昔みたいに。」

おにいちゃん「お前、ランク何？」

とらんぺっこ「ランク？」

おにいちゃん「おれ、ランク百以下の奴とは遊ばねえって決めてるし。」

とらんぺっこ「何言ってるか・・・わからない。」

おにいちゃん「・・・話通じねえなら話しかけてくんよ。」

ばたと扉を閉める音。それを遠くから見守るフィジカルお兄さん。

フィジカル「随分変わったな。僕。」

マー子「いつからかおにいちゃんは話をしてくれなくなった。おにいちゃんは中学校に入ってから変わった。昔はスポーツマンで・・・かっこいいおにいちゃんだったのに・・・ある時から引きこもって学校に行かなくなった・・・ねえそれも私のせいなのかな。

フィジカルお兄さん。」

フィジカル「都合のいい答えと、マー子が思ってる最悪な答え、どっちが聞きたい？どっち！どっち！」

マー子「……聞きたくない……そう言われたらどっちも……ナガオさん……」

彼方にナガオが現れる。チャイムが鳴るとそこへ学生たちが再び泳ぎながら現れる。学校の風景。学生たち、ナガオを見つけるとみんな一斉に野次を飛ばす。

マー子「ナガオさん……」

杏「みんな、そんな目で見ちゃだめよ。さ、大丈夫よナガオさん。自分の席に座って？気にしないでいいから。」

ナガオ「う、うん。杏ちゃん、色々と……ごめんね。」

杏「文化祭の事？ううん、気にしないでいいよ。臨時で私が実行委員長に……」

マー子「ナガオさん……」

ナガオ「マー子ちゃん。」

皆、冷やかすような声を出す。でかいばんそうこうを貼っているタチバナ、椅子を投げる。静まり返る一同。

杏「やめなさいよ。ナガオさん気にしなくていいから。浮いてたっていいんだから。」

ナガオ「浮いてたって……」

皆、ひそひそと『浮いてるよな』と話す。

マー子「ナガオさん！」

ナガオ「もう……もぐれない……もう……」

ナガオ、走り去ろうとするがタチバナが立ちはだかる。

タチバナ「逃げんな。」

杏「みんなひどいわよ、ナガオさんこの間のマー子ちゃんの件でただでさえ傷ついてるんだから！みんなで温かく迎え……」  
タチバナ「レズビアンでも？」

マー子「え？」

ナガオ「はなちゃん……」

杏「タチバナさん、やめて。」

タチバナ「はつきり言えよ、レズビアンって、あんたが裏垢で言ってたみたいにさ。(携帯を見せる)」

杏「なにそれ、冗談でも笑えないわよ。」

タチバナ「おまえさ、気持ちわりいんだよ。いや、こいつだけじゃないか。ここにいる全員、みんな気持ちわりいんだよ。」

杏「やめてよ、何があったか知らないけど私たちに当たらないですよ。みんな仲良く・・・」

ナガオ「はなちゃん、もうやめて。」

タチバナ「うわべだけ取り繕っても同じなんだよ！(ナガオに)お前もだよ、堂々としてろよ。それじゃあうわべだけのこいつらと何にも変わらねえだろうが！！」

ナガオ、耐えきれず去る。

マー子「ナガオさん！(追いかける)」

杏「ひどい・・・あんなこと言わなくなっちゃって。」

タチバナ「帰るわ、反吐が出る。」

タチバナ、去る。皆、とぼとぼと立ち去る。自分は悪くないと言わんばかりに。遠くに膝を抱えて泣くナガオの姿が見える、マー子に気づくと立ち去ろうとする。

マー子「ナガオさん！」

ナガオ「マー子ちゃん・・・私・・・ごめんなさい。」

マー子「何を謝られてるのか・・・正直よくわからない。私を殴ったのはタチバナだし・・・」

ナガオ「マー子ちゃん、私・・・もう潜れなくなっちゃった・・・」

マー子「え？」

ナガオ「もう皆・・・私の事・・・普通の目じゃ見てくれない・・・ネット上でも私の事気持ち悪いって・・・」

マー子「そんなことないっす。」

ナガオ「私はもう潜れない・・・浮いちゃった・・・皆から浮いちゃったから・・・」

マー子「ナガオさん・・・大丈夫っすよ私だって・・・」

ナガオ「私の好きでもないのに、慰めないで。(去る)」

マー子「好きって・・・何なのか・・・範囲が広がってわからない・・・今でもそれはわからない・・・それ以来ナガオさんは学校に来なくなった・・・私はまた一人になった。その代わり・・・」

夕チバナが現れ、椅子を投げつける(あたらないように)

マー子「あいつは椅子投げの選手なのか。いつもより椅子を投げてくるようになった。もしかしてあいつは私のせいだって言いたいのかな・・・」

とらんぺっこ、チャイムを吹く。と、再び水の中の教室が描き出される。

マー子「一人でも潜らなきゃ・・・」

マー子、海に飛び込む。

マー子「おはよう!!」

皆「お、おはよう・・・」

マー子「少しずつ浮かないコツを掴んだ。確かに学校は息苦しい・・・でも空気を読めば良いんだ。苦手だけど。」

杏と生徒が話しながら現れる。

杏「だよなー、まじで不倫とかありえないよね。いくらイケメンだからってさあ・・・」

マー子「わかるー」。

杏・生徒「ねー」。

マー子「ね、ねー」。

去る杏と生徒、次は先生が現れる。

先生「・・・そうかあこのネタわからないかあ。伝説の漫画なんだがなあ。」

マー子「わかるー」。

皆「いいね！マー子ちゃん！」

マー子「少しずつでも慣れていけばいいんだ。そうすれば。」

タチバナ、現れて椅子を投げる。

マー子「あいつだけは、慣れないな。いや慣れたくもない。」

授業が始まる。

先生「じゃあ今日こそ奈良時代を克服しちゃいましょう。今日は鑑真というお坊さんの話をします。」

マー子「ガンジン？」

先生「なにマー子ちゃん、ガンジン詳しいの？」

マー子「いえ・・・目が見えないお坊さんって事ぐらいしか・・・」

先生「良く知ってるわね。そうよ、鑑真は中国のお坊さんでね。仏教の為に来日した偉い人よ。なんと日本に来るために五度失敗しても挑み続けて、ようやく六度目に日本に辿り着くことが出来ただけど・・・その時には失明していたそうよ。」

マー子「何でそこまで・・・」

先生「山川異域 風月同天さんせんいきをことにすれども、ふうげつてんをおなじゆうす、訳するなら《山や川は日本と中国では異なっていて、月や風の営みは同じ空にある。》という意味になるわね。これは日本の長屋王という偉い人が中国のお坊さん達に当てて送った歌よ。鑑真はこの歌にいたく感激したそうです。それで仏教を広めて日本を救うために無茶をしたってわけね。」

タチバナ「くだらない・・・」

杏「タチバナさん！」

先生「そうか、くだらないか。でもね、人と人が手を取り合い生きるといふ、大きなテーマは悠久の昔から変わらないという事です。他者を認め合って、世界中の人たちと手を取り合えるっていふ……」

だんだんと周りの声が聞こえなくなる。

マー子「世界中の人たちと手を取り合う……すごい。ガンジンか……」

遠くにガンジン先輩が現れる。

マー子「あくまで私の中に無用なキャラクターを作ってしまった……」

ガンジン「無用とは何だね、失礼極まりないね君！」

マー子「ええと、初めまして。でもないか。」

ガンジン「うむ哲学だね、実際には会ったことは無いけれど毎日動画を見てるから心の中に僕を産み出してしまったわけだ。その僕に對して何と挨拶するのが適当なのか。これは深い。」

マー子「そうでもないと思うんですけど。」

ガンジン「鑑真。すごいだろう。」

マー子「ああ、先輩の方じゃなくて、お坊さんの方ですね？」

ガンジン「そうそう、他人を認め合って、世界中の人たちが手をつなげるようになれば僕らの居場所だってできるはずさ。」

マー子「理想……ですよね。そんなの。」

ガンジン「そうだね、理想だ。でもその理想のために鑑真は命を賭けた。しかも六回も。」

マー子「……」

ガンジン「信じてみるのも面白いだろう？」

チャイムのトランペットが鳴る。

マー子「それはきっと先の話だ。でもきっとそんな世界に皆向かっているんだ。だとしたら素敵だ。そしたら私も……ナガオさんも……でもそれまでは……潜ろう。誰の邪魔にもならず。誰にも傷つけられないように。おはよう……！」

先ほどとは違って変わって蜘蛛の子を散らすように皆去っていく。先ほどと同じように杏と生徒が話しながら現れる。

杏「だよなー、まじで不倫とかありえないよね。いくらイケメンだからってさあ・・・」

マー子「わかるー」。

距離をとる杏と生徒、足早に立ち去る。

マー子「え・・・」

先生「・・・そうかあこのネタわからないかあ。伝説の漫画なんだがなあ。」

マー子「わかるー」。

先生、距離をとる。足早に立ち去る。

マー子「なんで・・・どうして?」

先生「鑑真は中国のお坊さんでね、仏教のために来日した・・・」

マー子「その話・・・」

先生「山川異域 風月同天(さんせんいきをことにすれども、ふうげつてんをおなじゆうす) 訳するなら《山川は日本と中国では異なる

っていても、月や風の営みは同じ空にある。》という意味になるわね。これは・・・」

マー子「先生その話前にも！」

先生「そうか、くだらないか。うん、先生もそう思う。」

マー子「え・・・」

先生「人と人が手を取り合い生きるっていうテーマ？そんなものはナンセンスよ。」

マー子「そんな・・・だって素晴らしいテーマだって！」

先生「あのねえマー子ちゃん。この時代鑑真たち外国人が何を運んできたか、わかる？」

マー子「仏教を広めるために・・・」

先生「天然痘よ。」

マー子「テンネントウ？」

先生「病気よ。今も昔も外国人は日本にウイルスを持ってくるってわけ。勘弁してほしいよ。」

マー子「そんなのおかしい！鑑真は日本人たちを救うために！そそそんなのはおかしい！！」

皆、黙る。

マー子「え?」

杏「マー子ちゃん、大丈夫? なんだかウイテルわよ?」

マー子「ウイテル・・・え、ちょっと待ってよ。わかるー!」

先生「マー子さん、それ以上近寄っちゃだめよ!」

マー子「え??」

杏「マー子ちゃんごめんね、今のはちょっと近いかな?」

マー子「近い?」

先生「コロナにかかったらどうするの!」

マー子「コ・ロ・ナ????え?なにそれ・・・」

マー子が近づこうとすると、皆、一斉にシートを引き上げる。

皆「ソーシャルディスタンスー!ー!」

タチバナ「手をはらいのける(き)わんな。」



○コロナとおにいちゃん

暗い中ニュース番組が始まる。

キャスターB「福岡県内では二日、新たに145人の新型コロナウイルスの感染が確認され・・・」

暗がりの中マー子が現れる。その隣にはとらんぺっこことフィジカルお兄さんが正座している。三人ともマスクを着けている。

マー子「フィジカルお兄さん、体操しないの？」

フィジカル「知らないのかいマー子ちゃん。今は室内で運動を一緒にすると濃厚接触に・・・」

マー子「・・・とらんぺっこ、何か吹いてよ。」

とらんぺっこ「トランプットはウイルスが飛散するから・・・」

マー子「・・・何にもできないんだね。自宅待機って・・・学校も息苦しいけど、ずっと家にいるのも息苦しいなあ・・・」

三人ともへこむ。彼方にゲームにいそしむおにいちゃんが現れる。

マー子「これじゃあ・・・引きこもってるのと一緒にだ。」

おにいちゃん「こ、困ってるのか。ま、マー子。」

三人「え？」

おにいちゃん「いや、なんでも、ない。」

フィジカル「五年ぶりだ・・・五年ぶりに口を開いたぞ!!」

マー子「困ってる。困ってるよ!!おにいちゃん!!」

おにいちゃん「そそそそ、そうか!!ならひひ引きももりの極意をおおおしえてやらんでもないぜしかし。」

マー子「引きももり?」

おにいちゃん「ひひ、引きこもりだ。」

フィジカル「あんなしゃべり方だったっけ?がんばれ!僕!」

おにいちゃん「ひ、ひとと話すの。ひ、久しぶりだから。こ、こ言葉が、で、でないんだよ。(以降すらすらと徐々に慣れるから勘弁しろ。)

とらんぺっこ「慣れた!!慣れるのはや!!」

マー子「引きこもりの極意って?？」

おにいちゃん「そうだな。まずはピザを頼もう。」

マー子「ピザ?？」

おにいちゃん「引きこもりと言えばピザだろ。何がいい?」

マー子「偏見はなはだしいね、えと・・・」

おにいちゃん「確かお前、アンチョビとバジルと、トマトは食べれないよな。(携帯を操作する)」

三人「すげえ・・・」

マー子「おにいちゃん私の味の好み覚えてくれてたんだ!」

おにいちゃん「妹、ラブだからな。」

マー子・とら「きもい。」

おにいちゃん「それも含めてラブ。」

マー子・とら「まじキモイ。(二人、フィジカルを見る)」

フィジカル「僕を見ながら言うのやめてくれる?」

おにいちゃん「まってる、何か頼んでやる。コーラでいいよな。」

マー子「さわやかになりたいもの。あたりきさ!」

おにいちゃん「OK。」

マー子「・・・おにいちゃんどうして話しかけようと思ったの？」

おにいちゃん「・・・家にいるつらさはわかるから。それとゲームの事しかわからないけど。」

マー子「そうか・・・家にいるのがつらいなら外に出ればいいじゃん。」

おにいちゃん「そうは問屋が卸さねえところが引きこもりのミステリーだ。俺たちは心のソーシャルディスタンスを取ってるわけさ。先輩だぜ？あがめろあがめろ。」

マー子「ラッパーみたい。謎ね。」

おにいちゃん「謎だ。いつ解けるかわからない謎だ。待ってる間。ゲームでもするか？」

マー子「うん。」

去る二人。

フィジカル「さすが未来の僕だね。優しい心は捨ててない。」

とらんぺっこ「まあそこはおにいちゃんだから、ね。」

笑いながら去る二人。遠くにマー子とおにいちゃんがゲームをする姿が見える。

マー子「正直に言おう。おにいちゃんはきもい。でもおにいちゃんとうこうしてゲームをしていると、何だか昔に戻ったみたいだ。違うところがあると言えばゲームは昔よりきれいだし、おにいちゃんはお腹が大きくなった。男性が妊娠するはずがないから十中八九脂肪だ。私は空気を読んだり、環境が変わる事について行くのが苦手だ。亀のようにゆっくりとしか周りについて行けない。幸い・・・幸い？コロナの期間は長かった。私の亀もこれぐらい長ければ適応する。病気は怖いけど、コロナのおかげでおにいちゃんと話すことが出来たのは収穫だ。なのに・・・」

突然電話が鳴る。

マー子「タチバナ・・・なんだよ。最低女。今さら電話なんて。」

マー子そのまま無視する。着信音で変な踊りをする。電話切れる。

マー子「へへへ、どうだ、まいったか、タチバナ。」

また電話が鳴る。

マー子「しつこい奴ヨ、まったくしょうがねえなあ・・・(画面を見て)杏ちゃん・・・その時、ものすごく嫌な感じがした・・・もしもし?」

彼方に杏が走りこんでくる。

杏「もしもし?マー子ちゃん?マー子ちゃんところに・・・」

マー子「え?何?聞こえない?」

タチバナ「(現れて)マー子、てめえ、電話無視してんじゃねえよ。」

とら・マー子「げ、タチバナ。」

タチバナ「・・・まあいいや、そっちにリン子いる?」

マー子「リン子って・・・ナガオさん?」

タチバナ「そうだよ、いるのかどうか聞いてるんだよ!」

マー子「いないけど・・・」

電話切れる。走り去るタチバナと杏。

マー子「ちょ、ちょっと？一方的に切るとは何事ぞ！え・・・ナガオさん??」  
とらんぺっこ「何か、あったのかな・・・」

フィジカル「何かって・・・」

おにいちゃん「どうした、マー子。」

マー子「おにいちゃん、ちょっと私出てくる。」

おにいちゃん「は？馬鹿言うな。今はだって・・・」

マー子「行ってきますー!!」

マー子、出て行ってしまふ。

おにいちゃん「マー子ー!!」

フィジカル「待って！マー子ちゃん！」

彼方に走るマー子。それを追う一同。

マー子「きつとあそこだ・・・あの河原に。」

走るマー子をしり目にニュースキャスターが原稿を読む。雨や風の激しい音が聞こえてくる。

キャスターB「それでは次のニュースです。」

キャスターA「局地的豪雨をもたらした線状降水帯は依然として九州を覆っており、気象庁はこの後も土砂災害や河川の洪水に特別の注意を払うように・・・」

マー子が走ってきた先にナガオがいる。はだしである。

ナガオ「マー子ちゃん・・・」

マー子「どうして・・・はだしなんすか・・・」

ナガオ「水に入るのに靴は邪魔でしょ。」

マー子「それはそうすけど・・・いや、そもそも水になんか入らないでください。」

ナガオ「沈まないで、でしょ？」

マー子「それとこれとは話別でしょ。」

ナガオ「マー子ちゃんも一緒に潜ろう？」

マー子「残念ながらそれには・・・答えられないっす。」

ナガオ「だよね。じゃ。」

マー子「鑑真は、あきらめなかったそうっすよ。」

ナガオ「え？」

マー子「鑑真は、日本に来るために五回トライきめたらしいっすよ。」

ナガオ「・・・だから？」

マー子「すみません、なんかいいこと言おうと思ったけどそれしか出てこなかったっす・・・関係。ないっすね。」

ナガオ「関係ないっすね。」

二人、笑う。

ナガオ「ずるいよマーコちゃん。そういう新しい手は想定してなかったな。ガンジンは関係ないでしょくくくくく。」

マー子「ごめんなさい、ここで何かいいこと言えればいい芝居になると思ったんですけど・・・」

二人、笑う。

マー子「ダメっすか。こうやって笑いあうだけじゃ。」

ナガオ「・・・だめよ。そんなのはずるいわ。こんなのまるで普通の人みたいじゃない。」

その時、洪水の音が聞こえる。

マー子「何すか・・・この音？」

ナガオ「マー子ちゃん!!!」

暗転

○浮き沈み

明るくなるとそこには多くの人たちや物が水の中に漂っているのが見える。

マー子「水の中だ・・・正真正銘の水の中・・・でも・・・なんで・・・」

彼方にニュースキャスターの記憶が現れる。

キャスターB「それでは次のニュースです。」

キャスターA「局地的豪雨をもたらした線状降水帯は依然として九州を覆っており、気象庁はこの後も土砂災害や河川の洪水に特別の注意を払うように・・・」

マー子「ああ、そうか・・・これが洪水ってやつか・・・そうか・・・おにいちゃんの言う事、聞いたときや良かった・・・私・・・ほんとうに沈んじゃうのか・・・」

そこへナガオがやって来る。

マー子「ナガオ……さん……」

ナガオ「マー子ちゃん……私と一緒に、沈む？」

マー子「……私は……」

ナガオ「つらいだけだよ。地上にいたって……」

マー子「……」

ナガオ「ね。だから一緒に行こう？ウイテル者どうし、今度こそ正真正正銘沈むのよ。そしたら……」

マー子「ナガオさん……(トラ)え？」

と、その時、フィジカルお兄さんととらんぺっこが現れる。

マー子「とらんぺっこ……」

とらんぺっこ、彼方の一点を指さす。マー子、その方向に目を向ける。彼方に崩れたイスの中人影が見える。

マー子「何かを見つけてあ……浮いても……いいんすよ。」

ナガオ「マー子ちゃん……」

マー子「私は……世界中の人たちと手をつなぎたいっす。」

ナガオ「そんなの……もう流行らないわよ……もう誰もそんな事考えてないわ。」

マー子「みんな怖がってるだけっすよ。本当はみんなだって世界中の人と……」

ナガオ「きれいごとよ!!!マー子ちゃん、知ってるでしょう?彼らが自分と違う人間にどうしてきたか。白人は黒人を殺すし、西洋人は東洋人と手なんかつなぎたいと思ってるよ!!!見てごらんさいよ、病気が蔓延したとたんに他の国の人たちを遠ざけて……今度55は国同士、いがみ合いだって始めてるのよ!戦争になるかもしれない!人間は自分と違う者たちに寛容じゃないの!!!だから!!!」

マー子「私も、おにいちゃんとは手をつなぎたくないっす。」

フィジカル「えー!?!」

ナガオ「え?」

マー子「おにいちゃんきもいんすよ。オタクだし、めがねだし、引きこもりだし……でも……ほら。」

人影の一つからおにいちゃんが飛び出す。フィジカルお兄さん、おにいちゃんの元に駆け寄る。

おにいちゃん「マー子!!どこだ!マー子!!だめだ・・・どこにも・・・もう・・・やっぱり僕じゃ・・・」

フィジカル「あきらめるな!!!おにいちゃんであることを!フィジコー!!!!(二人はリンクしながら立ち上がる。)

二人「マー子!!!!!!手を伸ばせ!!!!お兄ちゃんが絶対捕まえてやる!!!マー子!!!!!!」

マー子「おにいちゃん・・・引きこもりのはずなんです。でも、私のために、外、出てるんすよ・・・」

ナガオ「そんな・・・でもそれは身内だから。そうじゃない人たちはコロナが怖いから・・・」

マー子「後ろ。」

タチバナ「マー子、リン子!!つかまれ!!!あたしの事は嫌いでもいいから、つかまれ!!!!!!」

ナガオ「そんな・・・」

マー子「あいつ、よくわかんない奴っすけど・・・たぶん助けたいんすよ。本心から・・・」

次々とクラスメイトや友達が現れて手をつなぐ。その手はマー子とナガオにのばされる。

皆「ナガオさん!マー子ちゃん!浮いてきて!!!!!!」

ナガオ「皆・・・」

マー子「浮いててもいいのかもしれないっす。きついけど・・・人間、どっか信じてもいいのかもしれないっす。ガンジン先輩の受け売りっすけど。」

ナガオ「マー子ちゃん・・・」

水の音が激しくなる。

マー子「い。息が・・・」

ナガオ、マー子にキスをする。と、畳の上にマー子を押し出すナガオ。

ナガオ「ごめん、マー子ちゃん。」

マー子「ナガオさん！……！！……！！」

水がナガオを襲う。

明るくなるとそこは最初のシーン。マー子が畳に寝転んでる。

マー子「そうか・・・だから私、助かったのか・・・でもわからないや・・・ナガオさん、私を助けるためにキスをしたの？それともただキスがしたかったの？ごめんって何？それでもナガオさんは死ぬことを選んだごめん？それとも私にキスをしたごめん？わからないよ・・・全然、わからないですよ・・・悲しいですよ、友達が命がけで救ってくれたのか・・・片思いの相手にキスしただけなのかわからないのは・・・悲しいですよ。」

それを見守るようにとらんぺっこ、フィジカルお兄さん、ガンジン先輩が現れる。

とらんぺっこ「信じるって決めたんですよ。」

フィジカル「だったら」

ガンジン「信じてあげなきゃ。」

マー子「みんな・・・生きづれえっす・・・やっぱり、この世界は、いきづれえっす。アスペさんにはついていけねえっす・・・」  
フィジカル「みんな一緒さ。僕も、」

とらんぺっこ「大人たちも」

ガンジン「偉い人たちや賢い学者でさえも・・・誰もがこの世界がどこに向かうのかわからずおびえているんだ・・・」

フィジカル「病気、災害、未来には戦争だってあるかもしれない・・・」

とらんぺっこ「何かの罰なのかもしれないね・・・」

ガンジン「だとしたら昔の人がやったみたいに奈良の大仏でも立てなきゃならない。この船がどこに向かうのか。本当のところは誰もわからないけれど、でも・・・」

三人「鑑真は希望に向かって船を出したんだ。」

マー子「じゃあ・・・泣くっす。」

フィジカル「どうして？」

マー子「ナガオさんは大事な友達だって、決めたから・・・その大事な友達を亡くしたから・・・泣くっす。」

ガンジン「泣きなよ。誰かが迎えに来るまで、君は一人だ。」

マー子、わんわんなく。辺りにサイレンの音が鳴る。そこへ登場人物たちが方々から現れる。皆、近寄ろうとするがソーシャルデイス

ダンスを気にするさまを見せる。距離を保てる所までで暗転。